

第 19 回北東アジア地域研究会・国立民族学博物館拠点（月例会）報告

平成 30 年 4 月 26 日、国立民族学博物館にて、北東アジア地域研究会・国立民族学博物館拠点（月例会）を開催いたしました。拠点構成員 3 名と総研大院生 2 名の計 5 名が参加いたしました。総合研究大学院大学の院生の高野哲司さんが、「日本の都市における庭の植物景観の移り変わり―東京都台東区谷中の事例―」と題して発表いたしました。

【発表要旨】

現在、長屋は老朽化や改築により著しく減少し、長屋特有の植物景観が確認できる場所が少なくなってきている。これまで、谷中地域においては建築学的な報告は有るが、長屋の植物景観に特化した報告は、ほとんど見られない。本研究の目的は、大きく 2 つある。1 つめの目的は、東京都台東区谷中における戦前、戦後から現在に至るまでに、庭の植物景観はどのように移り変わってきたのかを明らかにすることである。2 つめの目的は、東京都台東区谷中の庭を日本の都市の庭として位置付け、日本、中国、韓国の庭の植物景観に関する比較考察を行うことである。筆者は、東京都台東区谷中において、長屋、専用住宅を対象として、写真による植物景観の記録を行うとともに、『台東原風景』（2016 年 台東区教育委員会）という写真資料をもとに、居住者の方々に植物景観に関するインタビューを行った。さらに、台東区映像アーカイブ『谷中のすまいとくらし』（1981 年）、『谷中のすまい』（1985 年）、『台東原風景』（2016 年）に記録されている植物景観と筆者が撮影した植物景観との比較を試みた。

さらに、戦後における家庭園芸ブームと長屋の植物との関係および庭の植物景観と外来種の関係について考察を行った。

植物景観の変化については、かつてシュロチク（1600 年代に渡来）が植栽されていた場所が現在では、ハゴロモジャスミン等の植栽に変化したことや昭和 50 年代には四軒長屋の玄関先で多くみられたサツキ等の鉢植えが減少していることが明らかになった。

居住者の方から「カラスが多いので、植えていないのに生えている植物（ナンテン等）がある」というカラスが媒介するナンテン等の種子散布に関する情報が得られた。このことから、カラスは庭や軒先と上野公園や谷中霊園などの地域生態系とを結ぶ媒介者としての役割を担っていることが示唆された。

戦前の植物景観を構成する植物は草本植物では、カントウタンポポ（現地の呼称は、日本タンポポ）やドクダミが主体となっており、木本植物では、照葉樹のアオキやナンテンなどが主体となっていた。

谷中の長屋の植物景観と日本列島における家庭園芸ブームを重ね合わせたところ、谷中の長屋においては、1973 年から 1989 年までの家庭園芸ブームの影響は受けているが、1989 年から現在に至るまでの家庭園芸ブームの影響は直接受けてはいないことが明らかになった。このことから世代間における植物の継承を重視するとともに自然環境を活用した独自

の植物利用が展開されていることが示唆された。庭の植物景観と外来種の関係については、ムラサキカタバミの事例から、環境省と居住者の方との間では認識の違いが有ることが明らかになった。

日本、中国、韓国の庭の植物景観を比較すると、日本ではアオキ、オモトなどの観賞用に利用される植物が多くみられるが、中国の庭では薬草、料理に使う植物、果樹が主流であり、また、韓国では、家庭菜園が行われ、庭にはチャントプテ（調味料の甕）が置かれることが特徴であった。